渋沢栄一の生涯（一八四〇年～一九三一年）

渋沢栄一［渋沢史料館所蔵］

渋沢栄一は、一八四〇（天保十一）年、現在の深谷市血洗島で市郎右衛門と、えいの子として生まれました。幼い頃から、家業の農業や藍玉の製造・販売を手伝い、父や従兄の尾高惇忠から「論語」などの学問を学びました。少年時代には、作った藍玉を秩父・信州方面に売り歩くなど商人としての才能を発揮する一方、国の政治にも関心をもち、「進んだ知識や考え方を学び、武士中心の世の中を変えなければいけない」という思いをいだくようになりました。

一八六七（慶応三）年、栄一は、十五代将軍徳川慶喜の弟である徳川昭武に従ってヨーロッパの国々を訪問しました。その地で進んだ技術や文化、政治や経済のしくみなどを見聞きし大変驚き、栄一のその後の人生に大きな影響を与えました。翌年帰国すると武士の時代は終わり新しい明治の世の中となっていました。ヨーロッパで学んだ知識を生かして、静岡で日本最初の合本（株式）組織「商法会所」を設立しますが、一八六九（明治二）年、明治政府に役人（民部省租税正）として招かれます。栄一は、政府の新しい国づくりに貢献しようと、税金や貨幣の制度、鉄道の敷設、諸官庁の建築、銀行制度の制定などに力を注ぎます。世界文化遺産「富岡製糸場」の設立にも栄一は力を発揮しました。しかし、政府の国づくりに限界を感じた栄一は、「実業界で身を立てる」という志を立て、一八七三（明治六）年に大蔵省を去りました。「ヨーロッパの国々やアメリカの繁栄は商工業が発達しているからであり、日本も社会の豊かさや国民の幸せのため商工業を盛んにしなければならない」と考えていたのです。

その後、栄一は日本最初の銀行である、第一国立銀行の設立をはじめ、実業界のリーダーとして様々な産業の育成と五百社以上の会社の設立に努めました。栄一

は事業を進めるにあたって、「経済」の発展は「道徳」にかなったものでなければならないと説きました（道徳経済合一説）。いたずらに私利私欲に走るのではなく、公利公益も考え、社会全体を豊かにする、という考え方です。その根底には、幼少期に学んだ「論語」と、その精神「忠恕の心（まごころと思いやり）」がありました。

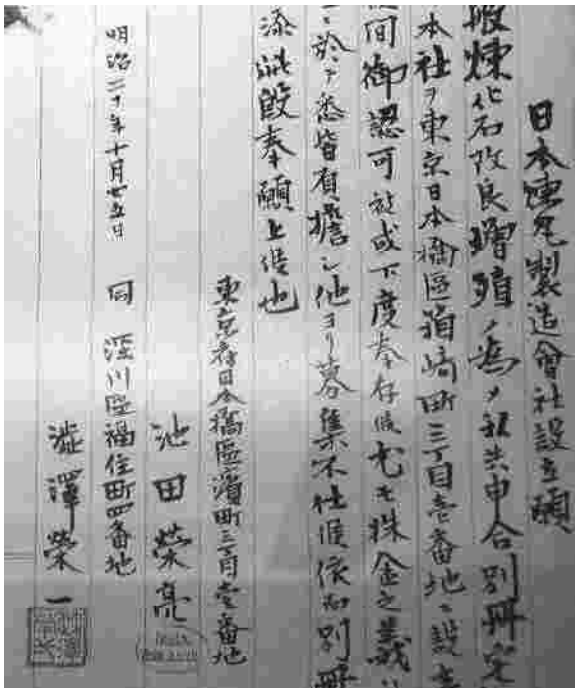
一八七六（明治九）年、栄一は、経済活動で忙しいかたわら、東京の養育院の事務長になります。養育院は、身寄りのない子どもや老人、障害者を保護する施設で、栄一は亡くなるまで院長として関わり続けました。また、孤児院や病院、学校の設立にも力を尽くしました。こうした社会福祉のために取り組む栄一の姿は、「論語」の教えや慈悲深く誰にでも親切だった母えいの影響を見ることができます。

「…お互いに自国の利益のみを主張せず、相互のために幸福を増すということを考えなければならぬ…」

一九一九（大正八）年、第一次世界大戦が終結したときの栄一の言葉です。栄一は、国と国との関係にあっても「忠恕」の心が大切であると考えていました。そして、日本とアメリカの関係を改善するために四度アメリカを訪問するとともに、子どもたちの相互理解に向けて人形の交換を進めるなど、積極的に国際交流・国際親善にも尽くしました。

一九三一（昭和六）年十一月十一日、栄一は日本の近代化に大きな足跡を残し、九十一年の生涯を終えました。

沿道で渋沢栄一を見送る多数の人々
昭和 6年11月15日東京・飛鳥山
［渋沢史料館所蔵］



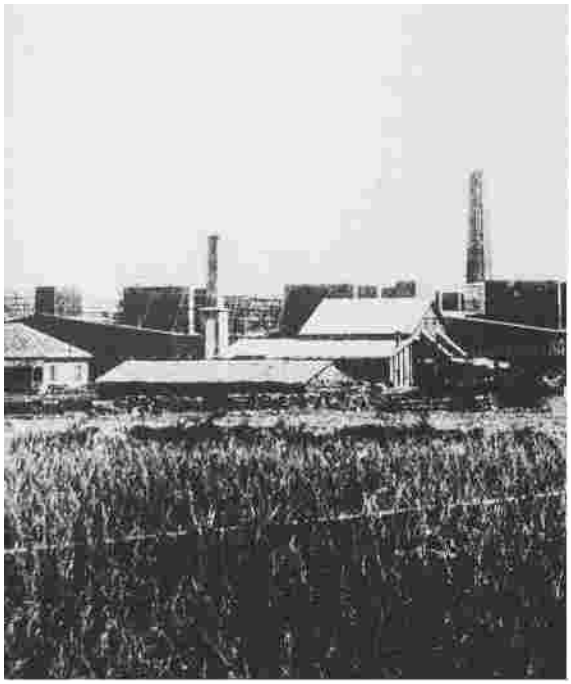
煉瓦工場の設立願　1887(明治20)年
［深谷市所蔵］

渋沢栄一
［渋沢史料館所蔵］

渋沢栄一とレンガ工場

一八八六（明治十九）年、明治政府は洋風建物を官庁街に建てることにしました。そして、その主な材料であるレンガを大量に生産することになりました。そこで、レンガを従来の手作業ではなく、機械によって大量に生産するレンガ工場の建設計画が進められました。しかし、資金面で官営のレンガ工場を建設することが困難でした。そこで、政府は工場設立を渋沢栄一らに働きかけることになりました。

栄一は、レンガ製造に関係していた池田栄亮と三井物産会社の益田孝と共同で事業に取りかかりました。一八八七（明治二十）年、良質な粘土が得られるという理由から、上敷免村（現在深谷市の明戸地区）にまたがる場所に日本煉瓦製造会社を設立することになりました。



創業当時の煉瓦工場 1889(明治22)年
[深谷市所蔵]

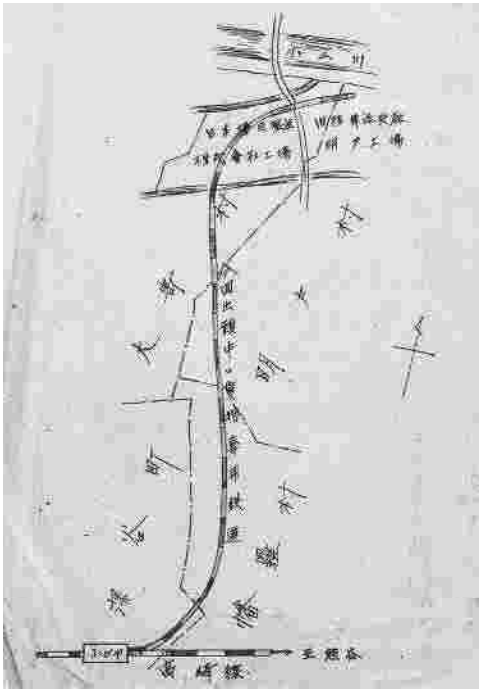
創業当時の関係者 1888(明治21)年
[深谷市所蔵]

栄一は地元の金井元治、韮塚直次郎ら村の有力者と建設予定地の買収を進めました。そして、原土となる粘土を掘り起こして畑を水田にすることや、工場での働き場ができることが地元の利益になると人々に訴えていきました。こうして地元の人々の理解と協力が得られ、一八八八(明治二十一)年春には工場の建設が始まりました。

同年九月にはドイツ人技師チーゼの指導によりホフマン式輪窯第一号窯が完成しました。また、平らな畑地が広がる地に高さ約五十メートルにも達する煙突がそびえ立ちました。近隣から見物に来る人もたくさんいたと言われています。

しかし、当初のレンガ製造では、「湿気の多い日本の気候に適した乾燥室を準備できない」、「製品の輸送(舟運)が予定通り進まない」などの課題を抱えていました。

日本初の民間専用鉄道　1895（明治28）年
［深谷市所蔵］



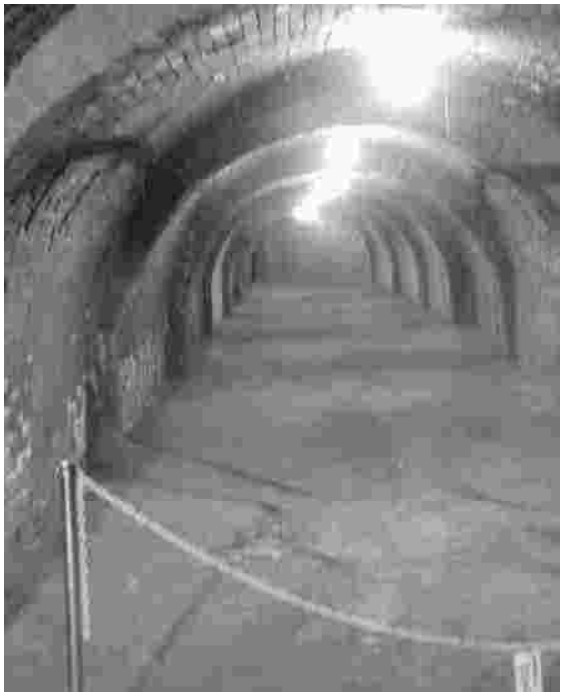
専用鉄道の路線計画図
［深谷市所蔵］

一八九四（明治二十七）年一月、レンガ工場の支配人であった諸井恒平は東京の栄一を訪れ、深谷駅と工場との間に専用鉄道を敷設することを相談しました。栄一は、かねてからレンガの鉄道輸送の利を考えていたのですぐに同意しました。その後、地主百十人ほどの人との用地買収の話し合いにも、栄一は東京から深谷に足を運びました。そして、地元の理解を得ようとするなど大きな役割を果たしました。

一八九五（明治二十八）年三月、レンガ工場から深谷駅に至る専用鉄道の建設工事が始まり、同年七月には専用鉄道が敷かれました。約四キロメートルの路線は、民間企業の専用鉄道敷設としては国内初のものでした。この結果、大量のレンガを、迅速に安全に輸送する条件が整い、レンガ製造も順調に伸びていくことになりました。なお、現在、専用鉄道線の跡地は、市民憩いの遊歩道となっています。

現在の東京駅
2019（令和元）年
11 月 2 日撮影

現在の深谷駅
1996（平成８）年
に竣工



ホフマン輪窯（国の指定重要文化財）

レンガ工場で造られたレンガは、日本各地の建物に用いられました。旧法務省や日本銀行、迎賓館赤坂離宮、信越線の「めがね橋」や東京駅などに使われました。レンガ工場で造られたレンガが日本の近代化に大きく貢献したのです。

深谷市にも、レンガ工場のホフマン輪窯、プレートガーダー橋を始め、明治から大正時代の建物が大切に保存されています。また、深谷市では、ＪＲ深谷駅を東京駅に模して建設・竣工したり（平成八年）、深谷市総合体育館（ビッグタートル）や深谷グリーンパーク、渋沢栄一記念館、新市役所庁舎などにレンガを使用したりするなど、栄一とレンガの歴史をふまえて「レンガを生かしたまちづくり」を進めています。

二〇〇六（平成十八）年、レンガ工場は閉鎖されましたが、「レンガ」とともに歩んだ深谷の歴史や栄一の思いは、レンガの建物とともにこれからも生き続けています。

『ふれる』 年表：渋沢栄一

1

年代	年齢	おもなできごと	日本と世界のうごき
1840 (天保11)	0	●2月13日 現在の深谷市血洗島に生まれる	
1845 (弘化2)	5	●父から読み書きを学ぶ	
1847 (弘化4)	7	●従兄弟の尾高惇忠から漢籍を学ぶ	○ 1853　ペリー来航
1854 (安政1)	14	●家業の養蚕、藍玉製造に精をだす	○ 1854　日米和親条約
1856 (安政3)	16	●岡部陣屋でご用金を仰せつかる	
1858 (安政5)	18	●尾高惇忠の妹ちよと結婚する	○ 1858　日米修好通商条約 ○ 1859　安政の大獄
1861 (文久元)	21	●江戸の海保塾や千葉道場で文武の道を学び、天下の志士と交わる	○ 1860　桜田門外の変
1863 (文久3)	23	●高崎城乗っ取りを計画、尾高長七郎（惇忠の弟）の説得により中止、渋沢喜作とともに京都へ逃れる	
1864 (元治元)	24	●一橋家の用人平岡円四郎のはからいで、一橋家に仕官する	○ 1864 ～長州征伐 ○ 1866 徳川慶喜、第15代将軍
1867 (慶応3)	27	●将軍徳川慶喜の弟昭武に従い、ヨーロッパに向かう	○ 1867　大政奉還 ○ 1868　江戸城開城 戊辰戦争
1868 (明治元)	28	●ヨーロッパから帰国する	
1869 (明治2)	29	●静岡藩に商法会所を設立する ●明治新政府に仕官、民部省租税正となる 新政府の制度改革にたずさわる	○ 1869　四民平等 ○ 1871　廃藩置県、郵便制度 ○ 1872　学制、鉄道開通 富岡製糸場完成
1873 (明治6)	33	●大蔵省を辞任し、第一国立銀行総監役となる	○ 1873　徴兵令
1876 (明治9)	36	●東京会議所の会頭、東京府養育院の院長となる	○ 1877　西南戦争
1878 (明治11)	38	●東京商法会議所の会頭となる 岩崎弥太郎と会食し、合本主義を主張する	
1879 (明治12)	39	●前アメリカ大統領グラント将軍の歓迎会	
1881 (明治14)	41	●日本鉄道会社創立	
1882 (明治15)	42	●妻ちよ死去	
1883 (明治16)	43	●共同運輸成立、大阪紡績工場落成 ●伊藤兼子と再婚する	

『ふれる』 年表：渋沢栄一

2

年代	年齢	おもなできごと	日本と世界のうごき
１８８５ (明治 18)	４５	●東京ガス会社創立 ●東京養育院の存続に努力する	○ 1885 伊藤博文初代内閣総理大臣
１８８６ (明治 19)	４６	●東京電灯会社等設立	○ 1886　ノルマントン号事件
１８８７ (明治 20)	４７	●東京人造肥料、帝国ホテル、日本レンガ製造等創立	
１８８９ (明治 22)	４９	●北海道炭坑等創立	○ 1889　大日本帝国憲法公布 ○ 1890　第１回帝国議会
１８９３ (明治 26)	５３	●王子製紙会長、石川島造船所会長	○ 1894 ～ 1895　日清戦争
１８９６ (明治 29)	５６	●日本精糖、東京印刷、東洋汽船等設立	
１９０１ (明治 34)	６１	●日本女子大学開校・会計監督	
１９０２ (明治 35)	６２	●兼子夫人とともに、アメリカ及びヨーロッパを訪問、国際親善につとめる	○ 1902　日英同盟 ○ 1904 ～ 1905　日露戦争
１９０７ (明治 40)	６７	●帝国劇場、日本化学工業、日本自動車等　創立	
１９０９ (明治 42)	６９	●多くの事業・諸団体の役職を辞任する ●渡米実業団の団長としてアメリカを訪問	○ 1910　韓国を併合
１９１４ (大正３)	７４	●日中の実業提携、親善に向け中国を訪問	○ 1914　第一次世界大戦
１９１５ (大正４)	７５	●パナマ運河開通博覧会の見学を兼ね、日米親善のためアメリカを訪問	
１９１６ (大正５)	７６	●第一銀行頭取をはじめ、金融界からも引退、社会公共事業に力を尽くす	○ 1918　富山にて米騒動
１９２０ (大正９)	８０	●国際連盟協会会長となる ●子爵を授けられる	○ 1919　パリ講和会議 ○ 1920　国際連盟に加入
１９２１ (大正 10)	８１	●ワシントン会議の成功を願い、アメリカを訪問する	○ 1921　ワシントン軍縮会議 ○ 1922　全国水平社
１９２３ (大正 12)	８３	●関東大震災発生、大震災善後会副会長として復旧・復興に力を尽くす	○ 1923　関東大震災 ○ 1925　治安維持法、普通選挙法 ラジオ放送始まる
１９２７ (昭和２)	８７	●日本国際児童親善会会長として、日米の人形の交換につとめる	
１９２９ (昭和４)	８９	●宮　中に参内、御陪食の光栄に浴する ●中央盲人福祉協会会長	○ 1929 世界的な大不景気（大恐慌）
１９３０ (昭和５)	９０	●救護法の実施について政府に働きかける	
１９３１ (昭和６)	９１	●１１月１１日死去、東京の谷中墓地に眠る	○ 1931　満州事変

尾高惇忠（一八三〇年～一九〇一年）

尾高惇忠［渋沢栄一記念館所蔵］

尾高惇忠は現在の深谷市下手計で勝五郎と、やへの子として生まれました。やへは渋沢栄一の父の姉で、惇忠は栄一の十才上のいとこにあたります。尾高家は農業をはじめ、米や油、塩などの商売、藍玉の製造・販売を行っていました。惇忠は商売の暇なときは農業にいそしみ、農業の暇を見つけては店の仕事をしていました。学問への情熱もあり、読書に親しみ、十七才のころには家で塾を開き近所の子どもたちに学問を教えるほどでした。栄一にも論語などの学問を教え、大きな影響を与えました。

一八六九（明治二）年、農業用水「備前堀」の水の取り入れ口が変更されようとした一大事に、地元農民の代表の一人として政府に事情を説明し、無事解決に導きました。こうした惇忠の才能と人柄が認められ、また、栄一の紹介もあって、一八七〇（明治三）年、政府の役人として富岡製糸場の建設に関わります。

惇忠は、建設場所の選定をはじめ、木材の用意、かわらやレンガの製造などの指揮をとりました。木材の伐採にあたって、近隣の人たちからの反対もありましたが、惇忠は「工場をおこすことが地元のためになる」と誠意をもって話し合いを進め、無事調達することができました。また、大量に必要なレンガも、韮塚直次郎の力を借りて、苦心の末に製造することができました。

一八七二（明治五）年、製糸場が完成しますが、フランス人が飲むブドウ酒が若い女性の血と誤解され、働く工女が集まりませんでした。その誤解を解くため、惇忠は自分の娘、勇を工女第一号として採用します。その努力が実り、各地から工女が集まり始めました。こうして、惇忠は初代の工場長として、工女の教育を大切にし、模範工場となるようその経営に努めました。

その後、惇忠は、東京府のガス局や養育院、第一国立銀行（盛岡支店）など栄一の関係する事業に力を注ぎます。盛岡ではこれまでの経験をもとに、実業家を育てたり会社の設立に関わったりするなど地域の産業の発展に大きく貢献しました。

韮塚直次郎（一八二三年～一八九八年）

韮塚直次郎［個人所蔵］

韮塚直次郎は、尾高家で働いていた久保田熊次郎と銀との間に生まれました。六才までを尾高家で過ごしますが、熊次郎一家は明戸村（現在の深谷市明戸）の韮塚家に養子に入ったため、韮塚姓となりました。そして、二十才から八年間、直次郎は尾高家で農業や油問屋の仕事を学び、再び明戸へもどりました。

一八七〇（明治三）年、直次郎は、富岡製糸場の建設の中心となった尾高惇忠から資材調達のまとめ役として任されました。直次郎はその期待に応えるため富岡に向かい、製糸場のかわらやレンガの製造に着手します。しかし、レンガは当時の日本では珍しい資材であったため、大変な苦労がありました。

幸いにもレンガの原料となる粘土は、笹森稲荷神社（現甘楽町福島）付近で発見されました。直次郎は福島および明戸村周辺のかわら職人をとりまとめ、数個のレンガを見本として、その地に窯を設けレンガ製造にあたらせました。しかし、何度くり返し焼いても、失敗の連続でした。そこで、レンガをくだいて水の中に入れたときに沈んだ砂粒にヒントを得て、さらに試作を重ね、ついに見本のレンガを上回る質のよいレンガを完成させました。直次郎は窯の周りを跳び回り「…天にも昇るような気持ちだった…」と惇忠に語ったそうです。その後、直次郎は富岡製糸場の完成に感謝して、工場全景を写した額（絵馬）を笹森稲荷神社と永明稲荷神社（深谷市）にそれぞれ奉納しました。

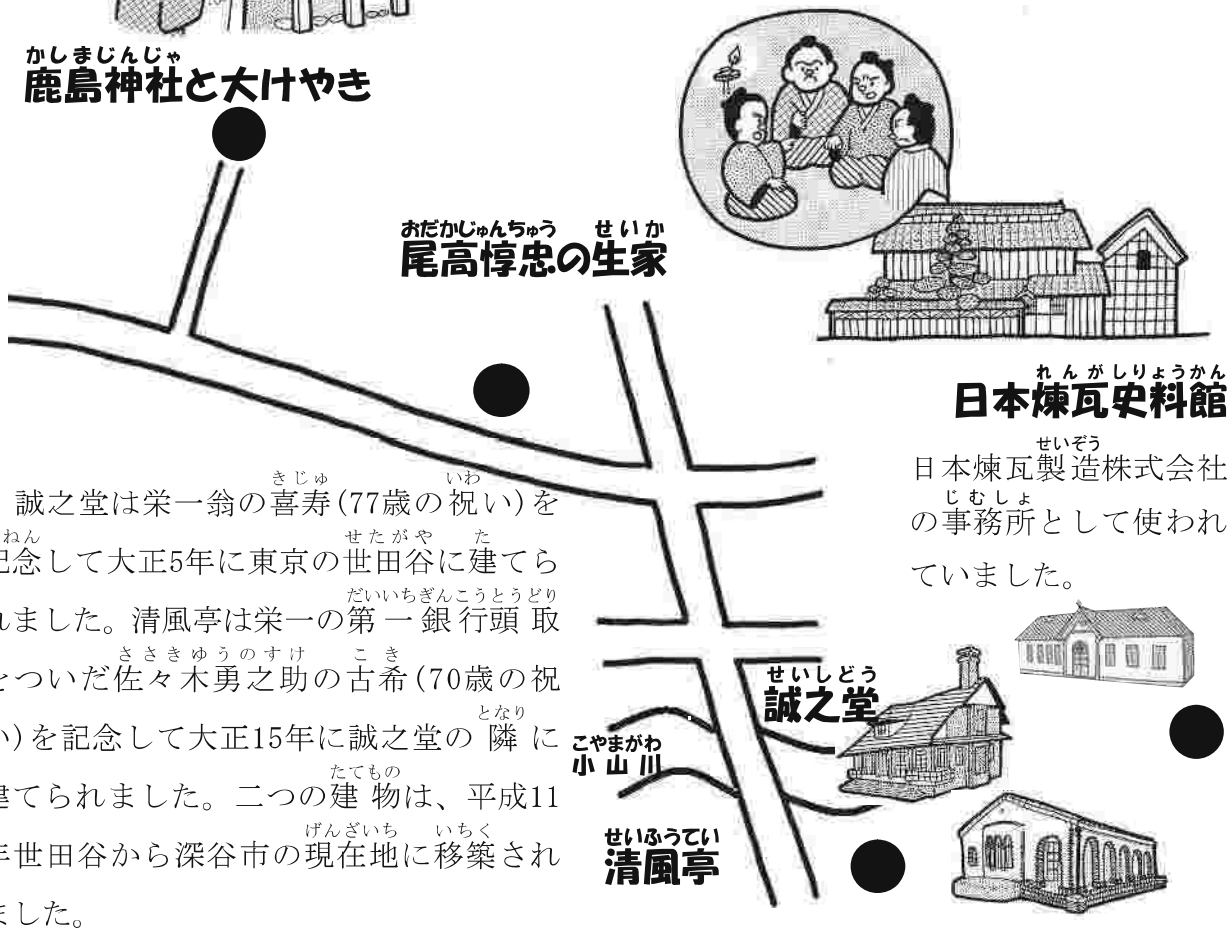
操業が始まると、直次郎は製糸場の賄い方（食料の用達）を請け負うとともに、自ら製糸所を設立し、経営にあたりました。また、妻の出身地が彦根（滋賀県）であることから、その方面から多数の工女を呼びよせました。

一八八七（明治二十）年、深谷の地（上敷免）に本格的なレンガ工場が建設されることになると、渋沢栄一からの依頼もあり、直次郎はこの工場の建設が地元の利益になることを人々に伝えるなど、村々との調整役の一人として活躍しました。

渋沢栄一翁ゆかりの地

鹿島神社には栄一翁の母が病気の人の背中をながしてあげた共同浴場がありました。その井戸跡が今でも残っています。

栄一翁が「論語」などを習いに尾高惇忠の家まで通った道（約1.3km）です。この道を歩きながら、世の中のことや生き方などについて、自分の考えを築いていったのでしょう。



誠之堂は栄一翁の喜寿（77歳の祝い）を記念して大正5年に東京の世田谷に建てられました。清風亭は栄一の第一銀行頭取をついだ佐々木勇之助の古希（70歳の祝い）を記念して大正15年に誠之堂の隣に建てられました。二つの建物は、平成11年世田谷から深谷市の現在地に移築されました。

日本煉瓦製造株式会社の事務所として使われていました。

調べてみましょう。

- ○ 渋沢栄一記念館　深谷市下手計１２０４　→「渋沢栄一記念館ホームページ」
- ○ 渋沢栄一生地「中の家」、誠之堂・清風亭、日本煉瓦史料館、尾高惇忠生家
  →問い合わせ：「深谷市教育委員会文化振興課」、「深谷市ホームページ」
- ○ 渋沢史料館　東京都北区西ケ原２－１６－１　→「渋沢史料館ホームページ」
- ○ 富岡製糸場（日本で最初の製糸工場）　→「富岡製糸場ホームページ」
- ○ 田島弥平旧宅（養蚕農家のモデル）　→「伊勢崎市ホームページ」
- ○ 高山社跡（養蚕の技術を学ぶ）　→「藤岡市ホームページ」
- ○ 荒船風穴（冷気を利用して蚕の卵を保存）　→「下仁田町ホームページ」

現在の建物は、明治26年から28年にかけて建てなおされたものです。当時の農家の生活の様子が伝わってきます。栄一翁の生家は、当時「中の家」と呼ばれていました。

渋沢栄一記念館・八基公民館

渋沢栄一翁の生地

館内には栄一翁の写真などの資料が展示されています。記念館北側には、赤城山を望む栄一翁の銅像があります。

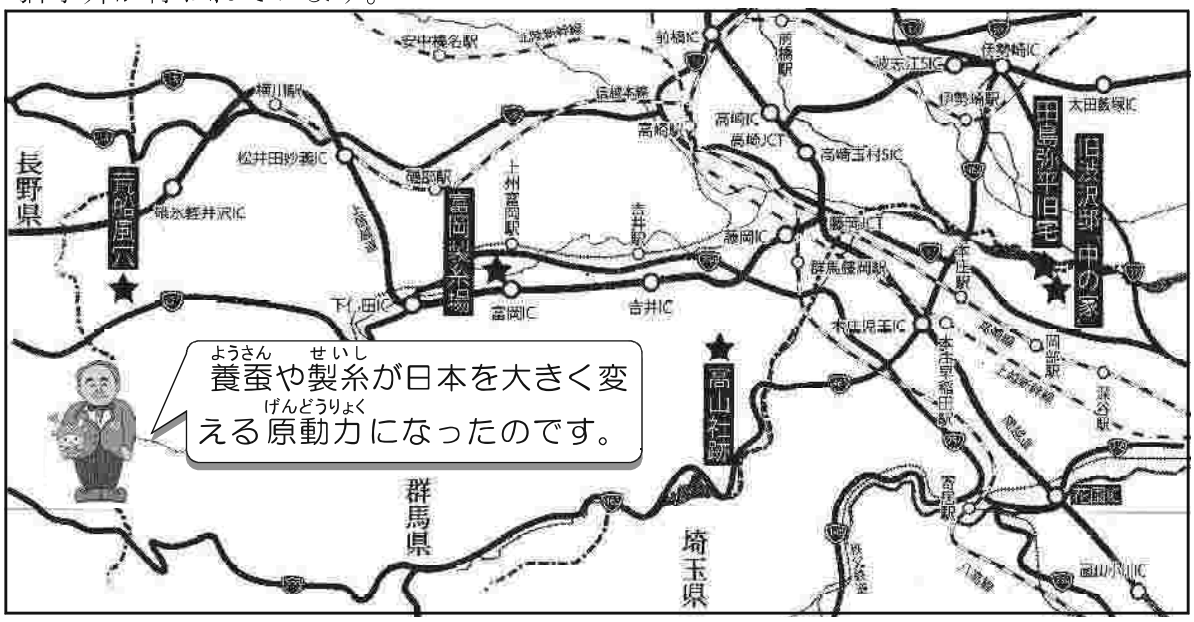
また、栄一翁の命日には「にぼうと会」が行われます。

論語の里

栄一翁が生まれ、「論語」を学んだ深谷市血洗島・下手計周辺の地域を「論語の里」と呼び、栄一翁関連史跡が集中しています。

諏訪神社と血洗島の獅子舞

伝統の獅子舞は、栄一翁が特に好んでいたと言われています。今でも10月には獅子舞が行われています。



「論語」は、孔子（二千五百年以上も前の中国の学者・思想家）の言葉や孔子と弟子との問答を中心にまとめられた文章です。渋沢栄一翁は、子どものころから論語に親しみ、生涯にわたって「論語」を心の支えとしていました。「論語」には、みなさんのこれからの生き方のヒントになることもたくさんつまっています。

◆子曰く、巧言令色には鮮し仁。

子 曰。巧 言 令 色 鮮 矣 仁。

言葉を巧みに使いかざったり、見かけだけにこだわったりする人には、思いやりの心があるとは言えません。

◆子曰く、剛毅木訥は仁に近し。

子 曰。剛 毅 木 訥 近 仁。

話がじょうずでなくても、自分の考えをしっかりもっている人は、学んでいくと仁徳（誠実、思いやりなど人としての心）をつみやすいものです。

◆子曰く、徳は孤ならず、必ず隣あり。

子曰。徳不孤。必有隣。

人として正しい行動をとっている人は、けっして一人きりになるようなことはありません。同じ考えをもち、同じ方向に進む人は自然と集まり、助け合う関係ができてくるものです。

◆子曰く、過って改めざる、これを過ちという。

子曰。過而不改。是謂過矣。

過ちに気がつき、改めることができれば、もう過ちではありません。過ちをそのままにしたり、ごまかしたりして改めないことを「過ち」というのです。

「似たような経験は、ありませんか。」

◆子曰く、父母は、ただその疾をこれ憂う。

子曰。父母唯其疾之憂。

お父さんやお母さんは、ただ子どもが病気にならぬことを心配するばかりです。親に心配をさせたりしないようにすることが孝行となるのです。

◆子曰く、苗にして秀でざるものあるか。秀でて実らざるものあるか。

子曰。苗而不秀者有矣夫。秀而不実者有矣夫。

穀物が芽を出して苗になっても、中には花もつけずに枯れてしまうものもあります。また、花をつけても実を結ばないまま枯れてしまうものもあります。人の成長もこれと同じで、途中であきらめず努力し続けることが大切なのです。

「心も体も日に日に成長し続けている自分を見つめてみましょう。お家の人と話し合ってみるのもいいですね。」

◆子曰く、学びて時にこれを習う。また説ばしからずや。朋遠方より来たるあり。また楽しからずや。

子曰。学而時習之不亦説乎。有朋自遠方来。不亦楽乎。

ふだんから復習をすると、その学んだものは自分の知識になります。なんともうれしいことではありませんか。同じ学問をめざした友人が訪ねてきて、ともに高め合っていけば、ますます自分の力は向上していきます。これもまた楽しいことではありませんか。

「子どもの頃のよい『習慣』は大人になっても続くものです。読書などはとてもよい習慣となるでしょう。三日坊主で終わってしまうこともありますが、自分らしい習慣ができるとよいですね。」

◆子曰く、故きを温ねて、新しきを知る。以て師となるべしか。

子曰。温故而知新。可以為師矣。

人の師（先生）となることは簡単ではありませんが、古きよき知識を大切にしながら、新しい学問を学んでいこうとする姿勢が大切なのです。

◆子曰く、それ恕か。己の欲せざる所は、人に施すことなかれ。

子曰。其恕乎。己所不欲。勿施於人。

一言だけで一生行っていくべきだと言えるもの、それは「恕（思いやり）」です。自分のしてほしくないことは、人にしてはならないのです。

「相手の気持ちを考えないで行動してしまったことはありませんか。」

深谷ゆかりの人物

●児童文学作家

北川千代（一八九四年～一九六五年）

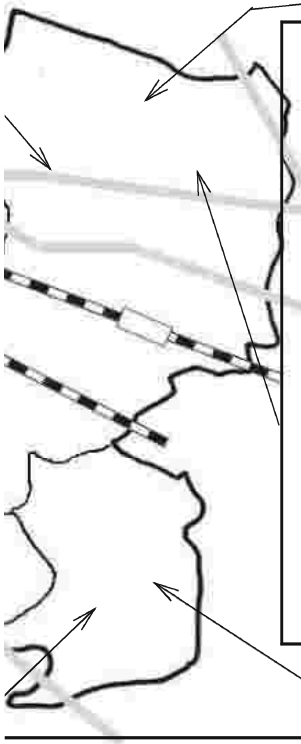
一八九四年、レンガ工場長北川俊の長女として大寄村（現在の深谷市大寄地区）に生まれました。千代が十歳を過ぎると、北川一家は東京でくらすことになりました。文学好きの千代は、大人になると児童文学作家として大成しました。千代の作品には、千代が子供のころ過ごした大寄地区の情景、レンガ工場の様子が登場してきます。

北川千代
［深谷市所蔵］

●女医第二号

生沢クノ（一八六四年～一九四五年）

一八六四年、医師生沢良安の三女として、深谷宿（現在の深谷地区）に生まれました。幼い頃より父の仕事に興味を持ち十三歳のときに「女医」になることを決意し東京に向かいました。当時、女性は医師になることが認められていない時代でしたが、必ず



●横浜港の建設に着手

笹井万太郎（一八二三年頃～一八九二年）

一八二三年、高島村（現在の深谷市豊里地区）の農家に生まれました。幼い頃より学問を好み、長じてからは江戸へ遊学し識見を深めました。一八五八年、日米修好通商条約を締結した幕府は、五港の開港に着手しました。そのうちの一つである横浜港の建設を落札したのが笹井万太郎です。万太郎は、「私利を捨て公益を選ぶこと、富ある者は社会に対する責任を心得るべきこと」を述べており、そのような考えに基づいて横浜港の建設を落札したものと想像されます。

横浜港開港を伝える瓦版
［個人所蔵］

●江戸時代の和算家

藤田雄山（一七三四年～一八〇七年）

一七三四年、本田村（現在の深谷市川本地区）の名主の家に生まれました。幼い頃から父親に算術（和算）の手ほどきを受け、二十三歳の時には、江戸に出て算術を学びました。関流和算の免許を授けられた雄山は、「精要算法」を刊行し、和算の教科書として使用されるなど、その後の和算の発展に大きく貢献しました。

雄山肖像画
［日本学士院所蔵］

●源平の合戦で活躍した武蔵武士

畠山重忠（一一六四年～一二〇五年）

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した武将。源頼朝の信頼が厚く、平氏追討や奥州藤原氏の討伐に活躍しました。特に急流渦巻く宇治川を先陣を切って渡る話や一ノ谷の合戦で、愛馬三日月を背負って急な崖をくだった話が有名です。頼朝の死後、北条氏に謀反の疑いをかけられ、二俣川（現横浜市）で壮絶

希望がかなう日がくると信じてクノは努力を重ねました。そして、二十三歳の時、医師の試験に合格し、熊谷市の荻野吟子に続いて、日本で二人目の女医になることができました。

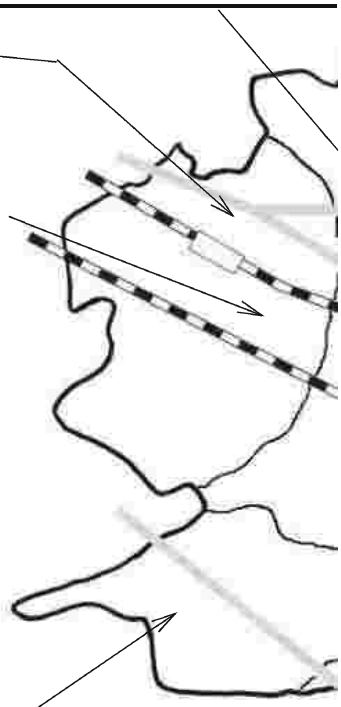
生沢クノ
［深谷市所蔵］

●埼玉県初のオリンピック選手

野口源三郎（一八八八年～一九六七年）

一八八八年、横瀬村（現在の深谷市八基地区）に生まれ、後に岡部村（現在の深谷市南地区）の野口家の養子となりました。一九二〇年、埼玉県初のオリンピック選手となり、日本チームの主将として、第七回アントワープオリンピック大会に出場しました。十種競技に出場し、十二位になりました。後に大学教授となりました。

野口源三郎
［岡部町人物史より］



●平忠度を討った武蔵武士

岡部六弥太忠澄（生没年不詳）

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した武将。源頼朝の旗揚げに従って、一ノ谷の合戦では、平家の武将、平忠度を討ち取り武功を挙げました。岡部氏の館跡は、普済寺の寺域及び隣接の地域にわたっていました。六弥太は、武勇に優れるとともに、情に厚い武将で、敵の名将、平忠度の死を悼んで、供養塔を建立しています。

清心寺：平忠度の供養塔

な最期を遂げました。

ひよどり越えの像
畠山重忠公史跡公園

●「彩の国黒豚」の生みの親

笠原五郎吉（一八八五年～一九五八年）

一八八五年、黒田村（現在の深谷市花園地区）に生まれました。一九一四年、黒豚を導入し、養豚を始めました。適度な歯ごたえがあり、脂肪の甘さが特徴の黒豚ですが、白豚に比べて飼育が難しいのが欠点でした。五郎吉は、改良増殖に手間と時間をおしみなくかけ、優良種豚の生産に成功しました。五郎吉が飼育に成功した黒豚は、今も「彩の国黒豚」として生産されています。

笠原五郎吉
［ふかやデジタルミュージアム］より

深谷の子「６つの誓い」

～渋沢栄一翁の心を受け継ぐ深谷教育

夢とこころざしをもち、まごころと思いやりのある深谷の子

立志の精神（夢とこころざし）

私は、

夢

に向かって努力します。

夢は、人生を豊かにします。
目標を立て、日々努力し、「こころざし」としてかかげていきましょう。

私は、

毎日勉強

します。

真剣に授業にのぞみ学び合うなかで、学力は定着します。
家庭でも計画を立てて、毎日学習をしましょう。

私は、たくさん挑戦、

体験

します。

実際に身をもって学ぶことで、新しい発見ができます。
今までやっていなかったことにも挑戦し、体験を広げていきましょう。

忠恕の心（まごころと思いやり）

私は、

すすんであいさつ

をします。

あいさつは、社会生活の基本です。
「おはよう」「いってきます」
だれにでも、気持ちをこめて、笑顔で元気にあいさつをしましょう。

私は、脱いだ

くつをそろえ

ます。

くつそろえは、気持ちを整えることにつながります。
いつでもどこでも、自分のくつはもちろん周りのくつも、そっとそろえてみましょう。

私は、

心のこもったことば

をつかいます。

「ありがとう」「どういたしまして」
「ごめんなさい」「大丈夫です」
支え合い、助け合い、人への思いやりは、温かい言葉となって表れます。ことばを大切にしましょう。

写真は全て渋沢史料館所蔵

深谷市教育委員会・深谷市子どもサポート市民会議・深谷市PTA連合会

深谷の子「６つの誓（ちか）い」とは

深谷市のめざす子ども像「夢とこころざしをもち、まごころと思いやりのある深谷の子」の育成につながる行動目標として、「立志の精神（夢とこころざし）」で３項目、「忠恕の心（まごころと思いやり）」で３項目をかかげました。

「立志の精神（夢とこころざし）」の3つに込められた思い

私は、夢に向かって努力します。

ばくぜんと抱いていた夢の中から、自分の成長とともに、自分が果たすべき役割など、進むべき道を定め、「こころざし」としてかかげていってほしい、という思いを込めました。

私は、毎日勉強します。

学校の授業においては、主体的・対話的な学び合いによる深い学びをこれからも進めていくとともに、各校で特色ある取組をしている家庭学習を今後も引き続き進めていってほしいという思いを込めました。

私は、たくさん挑戦、体験します。

社会的なルールを守ったうえで、今までやってこなかったことにも挑戦し、知らないうちに自分でつくっていた自分像を変えるチャンスでもあります。たくさんの体験により「こころざし」を立てる際の幅を広げていってほしいという思いを込めました。

「忠恕の心（まごころと思いやり）」の3つに込められた思い

私は、すすんであいさつをします。

あいさつを交わすことで互い気持ちよく過ごせます。あいさつは社会生活の基本といえます。家族でも朝起きたら「おはよう」を交わしてほしいなど、身近なあいさつからも忠恕の心を大切に感じてほしいという思いを込めました。

私は、脱いだくつをそろえます。

くつそろえは、一度自分の行動を止めることで、自分の気持ちを整えることにつながり、けじめの心を育てます。自分のくつはもちろんですが、はき乱しているくつを見かけたら、そっとそろえてあげる。そんな子どもになってほしいという思いを込めました。

私は、心のこもったことばをつかいます。

言葉は心を表し、温かい言葉が心を開きます。支え合いや助け合いから、人への思いやりは温かい言葉となって表れます。家族や身近な人にも、相手を思いやった言葉づかいをしてほしいという思いを込めました。

６月６日を「深谷の子『６つの誓い』の日」（令和元年度から）

○子供の育ちや学びには、基本的な生活習慣・学習習慣が大切です。「深谷の子６つの誓い」は、その習慣作りとなるものです。深谷の子の育ちをさらに支援するため、みんなで認め励ます日にしましょう。

○渋沢栄一翁の精神やその心を話し合いましょう。

家族と一緒に「６つの誓い」に取り組もう！

6月6日
深谷の子「6つの誓い」の日

☆「６つの誓い」をお家の人と一緒に声に出して読んでみましょう。

- 私は、夢に向かって努力します。
- 私は、毎日勉強します。
- 私は、たくさん挑戦、体験します。
- 私は、すすんであいさつをします。
- 私は、脱いだくつをそろえます。
- 私は、心のこもったことばをつかいます。

☆「６つの誓い」の中から、家族の人と一緒に取り組むことを選んで書きましょう。

私は、

☆誓いに向けて具体的にできることを考え、家族の人と一緒に取り組んでみましょう。

具体的な取組

家族から

月日	自分	お家の人
／		
／		
／		
／		
／		
／		
／		

（◎・○・△でふり返り）

☆家族の人と一緒に取り組んでみて、感じたことや思ったことを書きましょう。

具体的な取組

家族

深谷市歌

作詞　大久保ソノヱ
作曲　松原のエンニ

一

レンガの駅舎で　微笑みかわす
七色の光あふれる　花と緑の大地
遥かな山河を　そよ風が吹いてくる
みんなの笑顔が　虹の架け橋
深谷　輝くまち　深谷　私のまち

二

歴史が育む　城下の宿場
新しき日本創りし　人の生まれし大地
世代を受け継ぐ　進取の気　志
みんなに笑顔を　時の架け橋
深谷　希望のまち　深谷　私のまち

三

利根川　荒川　悠久　流れ
豊穣の恵みもたらす　生命育む大地
遥かに聞こえる　エスエルの汽笛さえ
みんなを笑顔に　夢の架け橋
深谷　愛するまち　深谷　私のまち

【深谷市の風景】

青淵公園　イルミネーション

小山川

ふっかちゃん　田んぼアート

ねぎと雪

鐘撞堂山

「渋沢栄一翁 こころざし読本～深谷の心を紡ぐ～」編集委員等

※敬称略・順不同

【編集協力委員】

嘉藤 央　荻野 浩和　強瀬 哲朗　本多 斎士　齋藤 直美　小谷野 聖二
浜野 清人　谷脇 由利奈　菅原 郁郎　髙野 明秀　古澤 美和子　末松 裕　小林 真穂
大熊 弘明　武井 一郎　会田 友香　松本 勇輝　大竹 真人　清水 祐輔

【編集検討委員】

土井 雅弘　斉藤 実　関口 良子　松島 猛　河田 重三　大澤 誠一

【協力者】藤沢小教材作成部

※挿絵協力　新井 彩加　津久井 里奈　／　埼玉県立深谷第一高等学校美術部生徒ほか

【深谷市教育委員会事務局】

小柳 光春　植竹 敏夫　吉田 勇　関根 正雄　小林 亘　飯塚 健太　浦部 誠

協力機関

深谷市役所　渋沢栄一記念館　渋沢史料館　富岡市役所　他

参考文献

・「渋沢栄一伝記資料（本編全 58 巻、別巻全 10 巻）」／　渋沢栄一伝記資料刊行会
・「渋沢栄一を知る事典」　編：渋沢栄一記念財団／東京堂出版
・「雨夜譚」　著：渋沢栄一（自伝）／　岩波文庫
・「論語と算盤」　著：渋沢栄一　／　国書刊行会
・「渋沢栄一」　著：渋沢秀雄　／　渋沢栄一記念財団
・「尾高惇忠」　著：荻野勝正　／　さきたま出版会
・「日本煉瓦１００年史」　／　日本煉瓦製造株式会社
・「学習まんが　人間 渋沢栄一」　著：渋沢史料館　／　竜門社
・「史料が語る横浜の百年」　／　横浜開港資料館
・「渋沢栄一のこころざし」　著：山岸達児　／　教育出版センター新社
・「雄山物語」　／　旧川本町教育委員会
・「八基写真帖」　／　旧八基村
・「赤煉瓦物語」／　あさを社
・「埼玉人物辞典」　／　埼玉県（埼玉県教育委員会編集）　他
・「深谷商業高校６０年史」　／　深谷商業高校　他

表紙等写真　清水　勉

「中の家（なかんち）」　渋沢栄一翁と表紙写真について

表紙の写真は、渋沢栄一翁が見た原風景を残す赤城山を背景に撮られた「中の家」です。「中の家」は、栄一翁の生誕の地であり、現在の建物は、1895（明治28）年に栄一翁の妹夫婦によって建て直されました。忙しい栄一翁でしたが、晩年は年に数回はこの家に帰郷しました。

裏表紙に関して

「深谷まつり」（裏・右上）「岡部ふれあいカーニバル」（裏・左上）
「小前田屋台まつり」（裏・右下）「重忠まつり」（裏・左下）

編集・発行　深谷市教育委員会
〒 366-0823 埼玉県深谷市本住町１７番３号
Tel 048-572-9578（学校教育課）
発　行　日　令和２年３月１６日